

# JTA通信 第8回

## 日々の態度と探求の姿勢

2025年9月10日

こんにちは、高本です。

この前、車中泊をしてみました。また次回の配信とブログでも扱うと思いますが、琵琶湖近くの道の駅で一晩だけ過ごして帰ってきました。

正式名称は、『知的遊牧生活大実験』なんですけども、一言で言えば車中泊ですねえ。

いくつかの経緯はあるのですが、全部削ると「車を家という設定にすれば家いらんやん！」という実験です。道の駅は24時間駐車場を利用できるところがいくつかあったので、そこを拠点として道の駅を渡り歩くスタイルでどれくらい粘れるのか最近考えておりました、その第一弾ということですね。

ちなみに僕は結構本読みたいので、そこをどうするかとも考えたのですが、これは図書館という全日本人にとっての本棚があることに気づいたので、3時間ぐらい本読みつつ文章書いて、水辺でギター弾きつつ、散歩して街を探索しつつ、適当に交流しつつ〜ってやれば案外いけてしまうのでは？という実験でした。

結果としてはいい感じのビーチが見つからずギターやりたい気にならなかったのと、奇跡的に図書館が休館日だったので盛大に破綻しました。

ちゃんとした振り返りも一応ありますが、そっちはまた別の機会に。

そんな惨敗ムードの中今回お送りするのは、天然で真理が分かる人、とれた麦でパンを作るだけ、「昨日と違うことをする」の本当の意味、の3つです。

## 天然で真理が分かる人と回り道をして気づく人

### 面白さとは何かを問う必要はあるのか

この前友達と喋ってたらすね、ちょっと深い話になりまして、人によって見え方が違うとか「同じものを見ててもあなたは全然見えてることが違うんやろうなあ」みたいなことを言われたのです、あなたとは言ってないですが。

そこから僕が何年か前に能を見に行った時を思い出しまして、そのきっかけが、ブログを書くようになって文章や記事やコンテンツの面白さとは何かということを考えるようになりその中でいろいろ掘り下げていくうちに能の風姿花伝にヒントがあるのではないかと思ったんですね。

確か適当に見た記事かなんかにその話題があった気がするんですが、とにかくいったん自分で読んで確かめてみようと、で、実際に読んでみると、能の一流の人とそうじゃない人の違いは、演じることができる役の種類が多いかどうかである、みたいなことが書いていました。どういうことかと言うと、いろんな種類をできる人はそうじゃない人に比べて同じ役をずっとやってる期間が短いと。極端な話、二種類しかできないと毎日交互にやるしかないわけですね。

そうなるともてる人からすればこいつずっと同じやつやな、ということで見飽きてくる。一方でも十種類出来れば、毎日やっても十日間のローテーションになって、新鮮さを保てる、この珍しさが面白さの正体だと書いてるんですね。

そういうのを読んでいろいろ考えてるうちに、じゃあ一回自分でも見に行ってみようということで実際に行ってみました。すると、喋ってる内容が分からな過ぎて全然面白くなかったわけですね。能の方は確か絶対に天皇とかの偉い人が出てくる話で、だから右大臣とか左大臣とかその辺の当時の役職やしきたりを知ってないとすごく見づらい。しかも何百年もやられてる話で台本は売ってるっぽいんですね。だから僕の席周辺のおじいさまおばあさま方はなんかずっと紙を手にとってみてたのです。

ということもあって非常に眠気を誘われたのですが、この話自体は別にどうでもよくて、そんなことを喋っていると、「でもブログとかって書きたいことがまずあって始めるもんなんじゃないん、面白さみたいなものを先に考えるのってちょっと違うくない？」的なことを言われたんですね、細かい話は忘れましたが。

それは実際にそうで、ここでいくつか扱いたいことがあってどっから行くか迷うんですが、1つはこれに対しての考え方、つまり面白さみたいなものを考える必要はないのかどうかという話。

これについてはその根源から考えていくのがまず面白いのですが、もうちょいちゃんと言えば、個人としてどうしても言いたいやりたい何か、というのはテーマであって、それがどう人に伝わるのかという表現の技術や考え方は別の話ですよ。雑に言うと、言いたいことを言いたいように言ってたらいいわけでもないということ。

本当はここにも分かれ道はあって、それでも別に言いたいことを言ってたらいいという考え方もあり、それが結果として周りにどう受け取られるのかという評価になるのかは神のみぞ知る的に、つまり誰にも興味持たれない可能性もあるけど言いたいこと言えるからいいというパターン。

でもこれはそうなるも別に人に向けて公開する必要がないわけで、結局は自分から出てきたものでその個人の外とのコミュニケーションが生まれるところに価値というか目的があるわけで、そうなるも、面白さとは何かみたいなことはずっと問い続けていくことになる。

## 結局はやりたいようにやるのが一番のオリジナリティ

あとはどこから書けばいいかむずいのだが、まずその友達は割とあれやりたいこれやりたいというのが先にあるタイプで、というか自分がやりたいようにやるのがいいというタイプ

で、僕はどちらかと言えば哲学方面に走りがちなタイプなんですね、だから先に面白さとは何か、みたいなことを考えたくなる。

だから彼からすれば「いや自分が書きたいことがあるからやるもんなんじゃないん」ってなるのは自然なのですが、僕のルートから行くとどうなるのかと言うと、今回は風姿花伝にある「面白さとは珍しさである」という論点だけで考えますが、これを推し進めていくと結局「自分のやりたい感じに素直になるのが一番である」という結論になるわけですね。

珍しさというのはオリジナリティとも言えて、このオリジナリティは究極的にはそれぞれの人が持つ個性、個性と言うと大げさですが「人それぞれみんな好き嫌いとかあるし違ってますよね」という最もよく言われるような一番手前にある違い、それがもうオリジナル。だからオリジナルを目指そう、珍しさを出そうとしなくても本当に自分の欲求や進みたい方向にやればそれがもう他の人と基本的には重ならない、つまりオリジナルということになる。

今のブログとか文章の話で言えば、じゃあ珍しさを追求してだれもしてない話をしようとか、この話を誰もしてない角度からとか考えなくても自分が興味のある話題掘り下げたいテーマ、なんか気づいたら吸い寄せられるようなジャンル、そういうものを素直に出していく、そこを誰もやってないからと言ってすり替えたり捻じ曲げたりしようとしなくていいことが、一番簡単にオリジナルになる方法で、こうなるとその友達が最初に出した意見に返ってくるんですね。

## 「定規で言うところのメモリが多いタイプ」の良し悪し

そうするとここでじゃあ次はここでまた二つのタイプがあって、直観で一撃でこの結論にたどり着けるこの友達のタイプと、僕のようにいろんなところに転がりながらなんやかんやでその結論になるタイプの二つ。で、これもどっちがいいとかでもなくて、でも僕は割とあれこれ考えて何かしらの答えが出てくるんですが、ちょっと周りを見てみたときに普通に過ごしていて、その考えに照準があってる人がいたりするのです。

例えば、大学の最初、四月でまだ授業に慣れていこうとしてる段階の時に、一週間大学に来ず東京に遊びに行ってた友達がいたという話を真面目と不真面目についての記事や本で書いたのですが、僕も後にやっぱ遊びが大事かあとと思ひ、感覚を磨くやらなんやらこねくり回して最終的に「ちゃんと遊ぶ」ということになるんですが、だから別にやりたい何かがあれば授業休むぐらい何でもないというか、むしろ何をそっち我慢してポーっと話聞いてとんねん、って感じですが、でもその彼はなんとなくでそれをすでに体現して生きていました。

みたいなことがいろんな場面であるのです。僕がいろいろ考えた末に、これか、ってなる感覚をもう天然でやって生きてるような人がいて、それは素直にすごってるんですが、じゃあそれがいいのかと言うと、それも意外とそうでもなかったりするわけですね。

「定規だとしたら人よりメモリが多いタイプですよ」と言われることがたまにあって、それこそ冒頭の件もそういう話なんですが、これは自分なりに答えを見つけようとしてあれこれ調べたり考えたりしてるうちに、メモリが細かく刻まれていくわけですね。

現在地から、その答えが感覚で分かってる人は大股の一步で到着できますが、それが分からなかったり、手前のところで大量の引っ掛かりがあってそれらを解消しようとしていると、必然的にその間のメモリが密になっていきます。

コンテンツの面白さとは何かというところから風姿花伝まで行って、珍しさが大事だからじゃあ一番珍しくなるであろうその人の個性というオリジナリティを考えると好きなように書くのがいいかって、めっちゃ遠回りです、まあ実際にはもちろんこんな単純なわけでもないですが、例として。

天然でこの辺りをもう感覚として分かってる人は、それを大事にして記事を書いていけばいいわけです。でもその間を詰めていくのが面白いと思っていて、というかそうやって作った自分の定規は別の図を書くときにも使えます。ただこれの悪いところというかデメリットになりかねないのは、そうやって論理の部分を整えることが優先されて物事が前に進まないことです。

この話で言えばそんないいからまずブログをかけ、とも言えるわけで、でも全くこんなことを考えないことの弱さは、思うような結果が出ないときにあがきようがないというか欲しい結果が出るまでそのまま自分の好きなようにやり続けるしかないということです。

## 仮説が先にあって間を整える

ちょっと話が戻るんですが、これって仮説が先に会って間の論理を整えていくのに近い気がして、科学もなんとなくこういうイメージなのです。「経験と意味」の話にも関係してきて、つまり、自分の経験にどんな意味付けをするか。

例えば、非専門家により作られ受け取られる芸術である「限界芸術」について調べていた時に、そもそもなぜそれが気になったのかと言えば、個人が自分の生活の中で芸術をどう扱えばいいのか気になっていて、芸術というのはいわゆる美術館で絵画を見るようなイメージで自分には関係のないことのように思っていたが、そこでじゃあそもそも芸術とは何かという話から考えてみたくなり、芸術を「その人の文脈で取り込んだ生活」というのもあっていいはずで、

それも文章を書くことが、見方によってはこれは十分に芸術と言って、それまで「コンテンツ」という見方しかしていなかったブログやその記事も芸術とか文学のフィルターで見ることでまた違った出力がなされるというか、直接的には文学や芸術として扱ってなくてもそこを経由して出力されたときにしか感じられない何かがあるかもしれない、それは風姿花伝とはまた別の「おもしろ成分」とでも言えて、

だから別に画家じゃなくても、むしろ画家じゃないからこそその芸術とのかかわり方があるはずで、その一つとして限界芸術という論理を採用できる、という流れだった。

で、その時にじゃあこれまた逆説的ではあるが、限界芸術論を見ていくと改めてブログというのも個人にとっての芸術、専門家と非専門家の限界領域にある芸術と見ることができて、そうなる個人レベルに限っても身の回りのイベントや行為を芸術と見立てられる場面が生まれてくる。

これはもちろん宮沢賢治が、「農民芸術」として芸術によって労働を上書きしていこうとしたことも含むが、そうやって経験の意味付けが変わってくる。むしろ今の話のようにブログや文章を書く事という個人の経験が先にあるから、その背後にある論理の存在に注意を向けることができ、それを明らかにしていこうとする運動の中で農民芸術や限界芸術がその個人の前に現れてくる。

科学で言えば、先に現象があるから、すでにある知識や法則とその現象の間に仮説を立て、そこを埋めていこうとする研究が始まる。これも経験に対する意味付けで、だからさっき、天然で真理のようなものに気づいている人と、回り道をして見つける人の2つのタイプの話をしたが、感覚的に見つけたものや大事に感じることと今の自分の間を埋めたり整えたりするように物事を掘り下げ探求していくのがいいのではないか、なぜそれがいいのか、網の目を密にすることだから。それによって一経験当たりの獲得意味量を増やすことができる。

## 「そこでとれた麦でパンを作るのが仕事でしょ？」

「捨てないパン屋」というパン屋さんの密着動画がYouTubeのおすすめに出てきた。パン屋は基本的に長時間労働で10時間以上働くのが当たり前らしい。細かい話は忘れたんですが、店主の田村陽至氏は両親から受け継いだパン屋さんで働いていたが、いろんな種類を用意したりこだわりを持ってやろうとする中で当然のように長時間労働になり、しかも毎日売れ残ったパンは大量に捨てられていた。

その時家にホームステイしていたモンゴル人の女性に「捨てるのはおかしいよ」って言われ、反論するものの、自分でもうすうすそれは感じていたので、辛い感じになってくる。

で、なんやかんやあってスペインを旅していた時に、道端でゲットした何種類かの小麦をスペイン人に見せて、「この中でどれが一番パンを作るのに適してるんですか」って聞いたらめっちゃ笑われたらしいのです。

その時に言われたのが、「そこでとれた麦でパンを作るのが仕事でしょ？」

くそ長い前置きになってしまったわけですが、これはすごく面白い話だと思って、「パンを食料として考えてる国とファッションとして捉えてる国の発想の違い」ってその後も出てくるんですが、「パンにいいも悪いもない、そこにあるもので作るのが職人の仕事で、麦を選ぶな」という発想ですよ。見た目とか味とかより、とにかくいかにそれを食すか。

「そこにあるものを何とかしてパンにして食べていく」のが本来のあり方で、それをもっと何かしようとして消耗してるのは本末転倒で意味わからんという話。

## そこにあるものを人の血肉になるようなものに変換するだけ

もう少し広げて情報発信とか文章的な文脈で考えてみれば、細かいテクニックとか言葉遣いとかはいらなくて、そこにあるもの、いま頭の中にある何かをいかに人が食べることでできる形にして明日を迎えるか、その繰り返しでしかない、そしてそれでいい。

通り過ぎたときにそこに何かができているような通り過ぎ方、後ろを向いてそこで立ち止まって、同じものをこねくりまわしてる場合ではない。そんなことは死にかけの時にやればよくて、まだまだ前を向いて歩いていきたいのだから、その足跡をどう形にするか、それだけを必死で考えて工夫する。

「そこにあるベストな材料を人の血肉になるようなものに変換する」という言葉も出てきたが、つまり、体裁とかを考えるより、そこにあるもので今一個作れよってことで、今日生きたときに残ったものが、その痕跡やその中で思い考え取り組んだことが誰かの喜びとなるように、それ以上の何かをしようとするのは自己満でしかなくて、一日たって昨日のことをどうまとめようとか考えるぐらいなら今日また何かが残っていくような過ごし方をしとけ、ということ。

## 「外見でも味でもなく消化しやすい状態になっているか」

店の従業員がお客さんに向けて書いた文章で、

外見や味が注目されてしまう  
けど、大切なのは、小麦を消化しやすい状態にすること  
そこは腕の見せどころだ

とあって、面白い。

外見が注目されるけど味はおいしいんです、っていうのは分かる。いろんなところで見かける話、容姿よりも性格とか、店はきれいじゃないけど味はいいとか。

でも味すらも外見と同じカテゴリーに振り分けて、そこじゃなくて、「小麦を消化することが大事、食べられることが大事」という考え方はあまり聞いたことがない。

何かを作ると考えたときに、例えば文章であれば、構成の美しさとか内容とかじゃなくて、その日の材料、その人から取れる材料が、受け取りやすい形になっているということ、ちゃんと読み物になっていること、ここだけなのではないかということ。

作る人の仕事は、内容や外見に拘る前にそこにあるベストな材料が、ちゃんと人を通過できる状態に持って行くこと、それを続けること、いかにそれを無理なく負担なく継続できるか、それが責任であり仕事であって、味はもうその味が合わない人は離れていくだけで、その人にまで満足されるように頑張る必要はなくて、むしろそれによって本来その味を好んで食べている人への供給にマイナスの影響が生じることの方が問題。

今は単純に消化しやすい状態を読み物としての成立に読み替えたが、こんな単純な話ではなく、「味ではなく消化しやすい状態」とは何か、ここは考えることのできる余白が大いにある。大切なのは味ですらない。

例えばおいしいかどうかという一瞬の感覚よりも、ちゃんと食事として成立したり、栄養として摂取できることが大事と受け取ることもできるかもしれないし、食べる人の健康がちゃんと考えられたものであるとも言えるのかもしれない。

## 一つの物理的対象にそれぞれの意味をかぶせる

「週3回しか窯を使わないから、使っていない日は従業員が自分でパンを焼いて別で活動してる」という話があったが、これも面白くて同じ対象にそれぞれの文脈を重ねるといふか、所有じゃなくていいという感覚。

動画の最後、移住先の田舎の畑の話で、耕運機もみんなで共有で、人の畑もみんなと一緒に手伝ったりしてるという場面があったんですが、これは最近よく考えていて、場といってもいいし、一つに集う関わり方とも言えるかもしれないが、まず場的に考えてみれば、

そこに人が集まることのできる空間があり、彼らが集まる理由となる広い意味でのイベントや催しがあり、そしてそこに自由な人の出入りがあり、でも時間がたつにつれて、または回を重ねる中でぼつぼつと固定のメンバーらしき人が現れ、定期的に来る人が現れてくる。

そして一部は固定でありながらも片側では毎回異なるメンバーがやってきて、トータルで、そのメンバーだからこそと言うと大げさだが、集まる人によって雰囲気はもちろん異なり、そこに新鮮さもあって、その一連の流れ、モデル、構図。

畑の手伝いと子供たちのキャンプのボランティアで参加したのもこの形式になっていて、毎回来る人がいたり、初めましての人がいたりして、そこでの交流やエネルギーの流れが起こってくる。これも見方によっては大枠としての秩序の中の部分的なランダム性という意味で「1/f ゆらぎ的」とも言えて、これが気持ちのいいことには納得がいく。

## 「人と人」ではなく「場と人々」

昔、プログラミングを勉強していた時に「もくもく会」というのに参加したことがある。これも主催の人が毎週、コワーキングスペースのような場所において、そこに来たい人は集まって各自黙々と自分の作業をしたりたまに話したりするという感じだった。

数回行ったが、メンバーが変わればどれぐらいがつつり作業してどれぐらい雑談するか、その話題も変わってきたりして、、自分自身単体で見れば、同じ時間に同じ場所に行き、機械学習の勉強というほとんど変わらない作業をしていても、そこでの時間の流れ方は毎回変わってくる。

こういうコミュニケーションの形というか時間の流れにはこれからの過ごし方としてかなり大きなヒントがあるように思う。

さっきの同じ物理的対象に異なる文脈をかぶせるという話で言えば、その場と自分自身の関係がまずあって、その上でその時そこにいた人との関わりが生まれるのであって、その場が誰によって作られたのか、ということは本質的な問題ではない。

ただ、その場がどのように機能するか、その場の色や空気のベースにはそれを作った人のイメージが反映されるので、間接的にはかなり重要ではある。こうなると「祭り」というのもキーワードとしては分かりやすい。

これも場がありそこに集まる人がいて、踊り、リズム、音楽があり、エネルギーが循環しているような空間。この空気感、ニュアンスをトレースしてきて、そのシートを、今生きている日常の世界にかぶせていくのが面白い。

そしてこの「場」の話になると、また電磁場や相対性理論、真空などの物理学における場の感覚が生きてくる。

## 昨日と違うことをする本当の理由

少し前におばあちゃんを病院に送迎した。と言っても初めてではなく最近何度か送り迎えしていたのだが、帰り道を少し変えることにした。

病院からの帰り道はざっくり二通りある、一つは往復方向に四車線ずつある道路の反対側に回っていく必要があって、こっちは近いのだがほっそい道から左折して合流してすぐのところでダッシュで一番右によって速攻右折してぐるっと回って反対側の道路に行く必要があります。で、もう一つは少し大回りして帰るルートでこっちは多分ちょっと時間かかるがのんびり帰れる道。

最初の一つ目の道で帰ろうとしたんですが、ばたばたして一個目の右に曲がりたいたところで曲がれずそのまままっすぐ言ってもう一周して二つ目のルートで帰ることにした。で、それ以降この二つ目ののんびりルートでひたすら帰ってたのですが、なんか今日はもう一回一つ目の道で帰ってみようという気になり、

というのはここから壮大なスペクトルでお送りするわけですが、よく「昨日と違うことをしましょう」という話があります。それは毎日適当にやっていると同じ繰り返しになってしまうので違うことしていきたいですね、という文脈です。

これは死ぬほど言われていて、もちろんそのまま受け入れて取り組んでいくのがいいと思うタイミングもありますが、少し考えてみたいのはこれというのは、というか、これについてはやりたいことが分からない時には過去にやりたかったこと全部一回やってみるみたいな話とも通ずる部分があることですが、まあそれもどうでもよくて、今考えたいのは、昨日と違うことをするというのは、「それによって今日がちょっと新鮮になって嬉しい」ということではなく、「その瞬間以降の、無数に枝分かれしている時間の流れから新たな一つを選んだ」ことに価値があるわけです。

すごく極端に言えば、最近似たリズムになってるな、とか、生活がなんとなく閉じた感じになっている、またはなっていくそう、という時の振る舞いは、それまでやってきた動きと同じようなことをして、それは図で考えると円状のグラフの上を歩いてる感じ、一日たつてまた同じ場所に戻ってくるような。

一方で、今日新しい選択をした、というのは、円状のレーンではなく、直進するレーンを選んだことになる。せっかくなのでさっきの4車線の話で言えば、例えば、一番左の車線は一周してまた最初のところに戻ってくる道で、残り3つはまっすぐ、まっすぐ、右折、という道だったとして、普段の生活は基本的にはずっと左車線にいるわけですよ、すごく安全な、スピード的にもゆっくり走っても特に問題でもなくて。でも途中で車線変更しないと、又左曲がってぐるっと回って同じ道に戻ってくるだけになる。



今日何か昨日と違う動きをするのは一つ右の車線にずれることで、でもそれも別にただ一つ横に行ったからと言ってずっとまっすぐ走れるだけで別に何かがあるというわけではない、あるわけではないが、でも何か出てくる可能性がある。

そもそもずっと左車線にいるのはよくないなと思ってることがまず、「未来のそうありたいとかそうあってほしいという像にあってない」ことの現れで、別にそのままでもいいと思えば何も変えようと思うこともないわけで、具体的じゃないにしても少なくとも今の左車線ぐるぐる集会ルートの人生はなんか違うという映像が見えてるから、どんどん隙あらば右にずれていこうと思える。

で、さっきも出てきたようにそれ自体に何か意味があるわけでもないのだが、でもそうやって景色が常に変わっていくからこそ立ち寄りた店や美しい光景がたまに出てきたりもするもので、病院の送迎に関しても、最初は頼まれたときにラッキーと思ったのです。僕ぐらいにもりもりに健康だとなかなか大きな病院に行くこともないので、ちょっと日常とはまた違った世界というか社会に入っていく感覚で面白かったのですが、何回か行くようになるとそれももう現状の中に取り込まれてしまう。

現状の波に抗うには新しい動きをどんどんねじ込んでいくしかなくて、そういえばこんな話も何回もしていたような気がしないでもないが、でもこれはおもしろくて、この面白さをどう表現するのがいいのかわからないが、その最近の感じと違う動きをしたことによるその日の出来事それ自体が面白いのではなくて、現実を微妙にずらしていった感じがおもしろい。すり替えねじ込み抗い、別の世界線に滑っていく。

無理やり量子力学っぽく言えばトンネル効果的、トンネル効果というのは本来壁があって粒子がそこを超えるにはその分のエネルギーが必要なのですが、量子レベルの小さいスケールのそんな世界では、ごくごくたまにスッと壁を抜けてしまうのです。それが現状という箱の外に出ていく感覚で、ポテンシャルの壁があって越えられないからと言ってその手前で遊んでても仕方がなくて、昨日までの時間の流れにない動きを入れることがその壁を抜けていく試行回数を稼ぐことになって、それが偶然の出会いとかイベントの機会になりもする。

ちなみに、そもそもなぜおばあちゃんの送迎がラッキーなのかと言うと、まず一つはシンプルに内容とか関係なく頼まれごとがラッキーということ。人に何かを頼むとか協力してもらおうというのはそれが今一番その人が望んでいることなわけなのでそれにこたえるだけで相当に喜ばれます。エネルギー循環的に考えてもそのままやることで感情というエネルギーの流れが発生し、循環の輪が+1ってことなのでまたしても盛大人生方向に進んでしまいます。

そしてそれは自分以外の誰かによって今日、目の前に持ち込まれるものなので、それ自体が昨日と違うイベントです。自力では出れないというか気づいていない箱とか枠みたいなものの外にひょいっとついでに出れてしまう。

病院の話で言えば、「病院ってやっぱ空気悪いな」「医者とか看護師ってこんな感じで仕事してるんや」とか自然と普段考えないことを考えることになって、もちろんこれも再三言うように別にそれ自体が何かあるというわけではありませんが、そこから次の展開や次に向かっていきたい何というか気持ちのベクトル的なものが出てきたりするわけですよね。

というのが頼まれごと一般の話ですが、今回の病院の送迎で言えば、ちょうど最近車の運転をしたいなと思っていたのです。というのは、僕は2、3年前に免許を取ったのですが、教習

所の最後のテストの時に教官に「君絶対事故るから気をつけや」って言われたので、かなり慎重になっていたのです。というか、そもそもそれを言わなあかん奴に免許を与えるなよという気がしないでもないんですが、それでそんなに運転してなくて、でもなんとなくもうちょいやつときたいな—ということ漠然と思っていたら、奇跡的にそんな機会がやってきたのです。

これも漠然とでも思い描いてるのがポイントで、だからそのタイミングでラッキーって気づける。目標というか未来のビジョンがあるからスコトーマが外れて、それに関係する機会に気づけるということになる。引き寄せとかマーフィーの法則も多分こんな感じなんじゃないかと思いますが、これによって「意外と運転いけるやん」ってなったので、この前は図書館に大体用事があるときは電車で行くんですが車で行って見たのです。

するとこれもそれまでの文脈とは違う動きになり、おそらく今後また運転絡みで何かイベントが発生して、さらにその先でまたこっちに進んでいこうって広がっていき、それを数年経ってから、じゃあ今この自分があるのは？って遡って辿っていくと、あの時病院の送迎を引き受け運転への苦手意識が弱くなったことがすべての始まりだったではないか、ということになったりする。

大学院卒業してから南米に行って今こんなことを書いているのも都合よく辿って行けば人と関わることを第一優先にしたとか、誘いを断らないようにしたとか、そういった5, 6年前の、当時の日常から外れた振る舞いを強引にねじ込み始めたところから今の現実が生まれてきてる、と僕の認識ではそういう都合のいい解釈になっていて、そしてこういう枝分かれば日常のあらゆる瞬間に滴り落ちている。

で、この話の肝は未来のビジョンというかそうありたい状態が、ある程度イメージとしてしっかりあるということで、それがあから別に今日いつもと違ったことするのがそのビジョンと直接は関係してなくても何度も繰り返していったときにどこかにめっちゃ関係するイベントなり出会いなりが落ちてるってことになるもので、それを見落とさないためには、「そもそもお前は何を拾いたいねん」ということを日々、烈火のごとく自分に問い続けていく以外にない。